子母澤寛全集　十五

お役者小僧　野火の鴉　他

編集委員　司馬遼太郎　尾崎秀樹

講談社

子母澤寛全集15

お役者小僧　野火の鴉

昭和四十九年十一月二十四日　第一刷発行

著　者　子母澤寛

装幀者　辻村益朗

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽二丁目十二番二十一号　郵便番号一一二

電話　東京(〇三)(945)一一一一大代表　振替　東京三九三〇

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえ致します。
定価は箱に表示してあります。(企)

© 梅谷龍一　1974
Printed in Japan

子母澤寛全集第十五巻　目次

お役者小僧……九
道場……一一
花実……二〇
若殿様……三〇
生死の境……三九
風の夜……四八
夏……五八
隅にいる奴……六七
女の操……七八
金創……八七
小えん様まえる……九七
桜ちりちり……一〇五
登城駕籠……一一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

続　お役者小僧……一二一
夏の日……一二三
雨の夜……一三〇
夾竹桃……一三六
転変相……一四三
不思議な声……一五〇
廓の朝風呂……一五七
鏡ケ池……一六五
良家の女……一七二
冬の朝……一七九
橋場の長吉……一八六
善の道悪の道……一九三
飛んだ大名……二〇〇

野火の鴉……二〇七
もちの木坂……二〇九
血篝……二二五
刀と刀……二四八
鴉……二七六
なさけ……二二五
世帯……二四〇
雪解時……二五六
江戸……二七二
風……二七八
朝凪……二九一

烈風……四二一
川留め……四二三
無頼……四二四
誓……四二六
友……四二八
川越……四二九
同道……四三一
霧の夜……四三三
破れ寺……四三四
流れる星……四三六
追分茶屋……四三八
街道……四四〇
東山……四四二

竹藪の中……四四四
地下の火……四四五
地固め……四四七
夜登城……四四九
腕の職……四五〇
御前……四五三
将棋……四五四
嫉視膾……四五五
肚……四五七
江戸ッ子……四五九
菜切脇差……四六一
日月……四六三
月下……四六四

雪の日……四六六
再会……四六七
掘立小屋……四六八
清水港……四七〇
次郎長……四七二
夜明……四七五
連珠砲……四七七
紅染の旗……四七八
湯場……四八〇
二人……四八二
道……四八三
精兵……四八六
長源寺……四八七

名代……四八八
太公望……四九〇
只一人……四九三
墓……四九五
舞鶴城……四九七
先導……五〇〇
奔流……五〇三
解説・尾崎秀樹……五二四
付　吉田大八関係写真＝写真・榊原和夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お役者小僧

道場

珍らしい事もあるものだ。――一稽古を終った稲葉剛太郎は、道場の隅で、汗をふきながら、そんな事を思っていた。きのうの朝自分の家へやって来ての帰りに、今日ここで一緒になる約束で、ちゃんと時刻まで、はかって来たのに、あの几帳面な根岸が、姿を見せない。父の塾へ来るにしても、雨が降ろうがかって欠席という事のない根岸だ。

この撃剣道場もその通り。しかも、今日は特に先生から内談があると云われているのに、来ないというのは、腹が立つよりもむしろ愉快になるような出来事だ。

三四日つづけて、雨が降った。きのうは一ん日中、ひどい土砂降りだったが、それがどうだ、今日は、まるで天地をどんでん返したように、いいお天気になった。

真っ黒な雨雲で、榛名も赤城も、どっかへ逃げて行ったように、ちらりとも姿を見せなかったのを、今日は青々とした空に、くっきりと。まして裾へ立罩めた靄の上へ浮んだ姿は、何んとも云えない美しさだ。

何処も桜は四分咲き。それに若葉も雨に洗われて、まぶしい陽ざしの心地よさを、根岸はどうして道場へ来ないのだろう。

先生の天野信友も、初心の者への丁寧な稽古を終ると、道具をときながら、

「稲葉。根岸が見えんな」

と、振り向いて声をかけた。

「あの男が参りませんなどという事は、何にかに、化かされているような気がします」

「そうだよ、いつも真ん中に頑張っている根岸源五兵衛の姿がないので、わしは、ここがわしの道場ではなかったのではないかと思ったりしたよ。はっはっはっ」

「幾年にもない珍らしい出来事です」

「しかし」

天野先生は、ちょっと言葉を切って、

「その中には参るだろう。とにかく奥でお主へだけでも一応話をして置こう。奥へ来給え、稽古着のままでいいから」

そういうと、肩をふるような大股で、無造作に直ぐに奥へ入って行った。

剛太郎は、まだ汗が出ている。それをふき乍ら、後へついて行った。一寸、道場の出入口を振返って、も一度、源五兵衛の姿を待ったが来ない。

天野先生は、肥っちょの女中と雇婆さんを対手のやもめ暮しだ。居間の縁側の障子を開放してある。なだらかな陽

ざしがさし込んで、真っ正面に、赤城の山が見えている。四つ目垣の向うに、森が見えて、その森の中に、桜が咲いている。小さな木で、花もまだ遅くれているようなのが、却って風情がある。

女中が茶をくんで出した。先生は、それでもきっちりと座って、

「実は、他でもないんだが、今年は五月の御節句に、城中で、家中諸士の御前演武が行われる御内達があってな。勿論、お主も源五兵衛も出る事になろう」

「はあ」

剛太郎も、その噂は内々耳にしていた。やっぱり本当かと思いながら、先生の顔を見詰めていた。

「知っての通り、ここ、三年打絶えていたので、近隣諸藩の有志をも招待し、相当の御催になる筈だ。それでだ、わしは、お主たちに花も持たせ、またわしとしても窃かに期するところあって、その前にお主と、根岸両名に、免許皆伝し、その披露も催して、その上で、お主たちに、晴れの場に出て貰おうと思うので」

「え？　わ、わ、わたくしの皆伝をお免し下さいますか」

「そうだ。今月半頃には、それを披露し、藩庁へも届出で、御前体への御披露もいたす考」

「と、と、飛んでもございませぬ先生。源五兵衛はともかく、わ、わたくし如き未熟が」

「いや、未熟か否やは、この天野信友の目がねである。不肖乍ら、天野、如何な名門のものなりとも、未熟のものに皆伝はせぬ。そういう事は大嫌いな男だ」

「は、は」

「それで、お主たちに、心構えもあろうと思って、予め申置く次第」

それから間もなく、二人とも道場へ戻ったが、やっぱり源五兵衛は来ていない。そればかりでなく、流石に剛太郎も、心が浮いて、もう、竹刀を手にすることは出来なかった。殆んど、皆伝者を出さない事で有名な天野道場で、自分と、無二の友、源五兵衛が揃って、その列に入る事と、もう一つは、その誉れを担って、諸藩の有志に立交って、御前演武に出るという事とで、どうしても落着くことの出来なかったのは無理はない。

いや、それよりも、とにかく、これを一刻も早く源五兵衛に知らせてやりたい。それに今日の欠席も気になるし——。

剛太郎が高崎の城下街、片町の天野道場を出た時は、空はいよいよ青く、赤城、榛名の裾も、ずうーっと広ろがって明るく、お城の山のいただきに近く、白い雲が、細そく銀の線を引いたように流れていた。

七つ下り。ぱっと、全身陽を受けると、じんわりと肌に汗ばむ。

＊

剛太郎は、稽古道具を、竹刀に突通して、軽く肩へかついでいた。晴れてはいるが降りつづきで道は悪るく、そちこちに水たまりが、春の陽を映して、意外な所が、鏡のように光っている。どろどろのぬかるみもあり、車のわだち

も深々と見えるところがある。

父、稲葉剛斎の漢学の塾は、弓町にあるが、剛太郎の足は、考える迄もなく、道場から少し北に当る御徒町の根岸の屋敷へ向いていた。源五兵衛の家は五十石取りの御徒歩小頭である。

同じような小さな屋敷の塀がずっと続いて、街角の辻行燈の前が、大きな水たまりになっている。

剛太郎は、源五兵衛の違約のことなどは忘れていた。只、少しも早く、今日の先生の言葉を伝え、喜こばせたい一心に、やや急ぎ足になっていた。それにも一つ剛太郎の心の中にちらちらするものがある。日頃は、それあるが為めに、根岸家を訪ねたくもあり、また、それがある為に、何かしら自分の心の奥底を誰かに覗き見られるような気がして、訪ね難いものであったが、今は、それも、これも、少しのわだかまりのない明るいうれしいものばかりであった。

しかし、その剛太郎をいきなり、地獄のどん底へ叩き込むような事実が、その眼の前に儼然と出て来たのである。

「あっ！　こ、これは」

流石の剛太郎も、そこへ立ちすくんで終った。すくんだというよりは、まるで棒を呑んだように突立って、進む事も、退く事も――というよりは、己れを忘れて終ったという方がいい。

「ど、どうしたのだ？」

根岸の家の門は、堅く閉ざされ、門の扉の外には、太い青竹が×字型に結ばれて、しーんと重く静まり返っているのである。そう云えば、さっきから、通る人々が妙な顔つきで、目ひき、袖ひき、何にやら、ひそひそとささやき合っては、この屋敷の前を通るようではあったが――。

「閉門！」

剛太郎は、まるで自分へ云って聞かせるような声で、思わず、そう叫んだ。

源五兵衛の父、源蔵は、家中に知られた廉直誠実の士である。源五兵衛が、その一日一日を、まるで定木を当てたように、きっちりと、少しの狂いもなく送っているのは、その父の感化である。この親にしてこの子であることを常々、しみじみと感じている剛太郎にとって、この人の閉門などとは、どう考えても夢であるとよりは外に思えなかった。

が、正に閉門である。

閉門の屋敷へは、元より一切の出入は厳禁だ。しかし、この場合、剛太郎が、この屋敷に入らず、源五兵衛に逢わずに、帰るという事は出来る筈がない。

剛太郎は、真っ蒼であった。そして、少し吊り上った眼で、きょろきょろと周囲を見廻してから、その黒い塀に沿って、右手から、忍ぶように、裏門へ廻って行った。

手をかけると、裏門は、すぐに開いた。勝手は知っている。つかつかと内玄関へ廻った。小砂利が敷いてあって、八つ手の葉が地へすれすれに繁っている。そちこちに八つ手の多いのは、主人の好みであろう。

「御免」

剛太郎は、低いが強い声で、内へ呼んだ。
閉門の屋敷へ、ありうべからざる来客である。いささか驚ろいたのであろう。それともその声が剛太郎であると知ったのか、そこへすっと、出て来たのは、全く無腰になっている源五兵衛であった。
「どうしたという事だ」
剛太郎は、速や口でいった。
「どうしたも、こうしたもない、こういう儀だ、わざわざとお言葉だったのに、参らんで、天野先生に申訳ないと思っている」
それでも源五兵衛は、割に落着いて、顔色は、平常と少しも変っていなかった。
「天野先生どころではない、いったいどうした事なのだ」
「今朝、にわかの上使で百日の閉門だ。父がお目付へ土下座の礼を欠いたからだそうだ」
「何？」
まじまじと焼きつくように顔を見る剛太郎の目なざしを避けて、
「閉門の屋敷へ出入は同罪になる。危ない事をするではないか」
「そんな事はどうでもいい。目付へ土下座の礼を欠いたというのは、どうした訳だ」
源五兵衛は、玄関から、履物をつっかけて、八つ手をくぐるようにして、出て来た。
「屋敷へ入って貰いたいが、万一の場合、それが知れると、また罪が重くなるから」
とつぶやいて、
「おお、いいお天気だなあ」
まぶしそうに空を仰いで、まるで閉門の事など忘れたように、この時はじめて、にっこりした。日頃、あんなに堅苦しい人間で、むしろ小心に見えた源五兵衛が、こんな時に、こんなに悠々と、物に動じない様子を見て、剛太郎は、また改めたように、その顔を見た。眉の太い、鼻の高い顔が、浮彫りでもあるように、くっきりとしている。
「御尊父は、あのようなお方だ、お目付への欠礼というは腑に落ちない」
「いや、何あに——欠礼といっても、別に無礼を働いたの何んのというのではないのだ。きのう、雨だったなあ」
「うむ」
「あの雨の中で、父はまた何にを思い立ったのか、丁度わたしが、御主のところへ行っていた頃、大信寺へお詣に行ったものだ」
「うむ、うむ」
「寺の近くで、向うから、お目付向山隼人どのが御家来両三名を供にして、来られるのに出逢った。ひどい雨故、こう傘を前ざしにしていたので、人の来る気配で気がついて、これがお目付とわかった時、もうすぐ眼と鼻のところだったので、父はあわてて土下座をした」
「うむ」
「が、何分にもあわてているのと、何んにしても、あの土

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com